

クリスマスおめでとうございます。

主のご降誕の喜びの中で迎えたこの朝、私たちはみことばの受肉の神秘を高らかに歌い上げる賛歌にあらためて耳を傾けました。ヨハネ福音書の冒頭に掲げられているこの「みことば賛歌」は、クリスマスの夜、羊飼いたちがその場に駆けつけて見た、飼い葉桶に寝かされている乳飲み子の神秘を歌い上げています。そればかりではなく、ヨハネ福音書はその冒頭にこの「みことば賛歌」を掲げることによって、クリスマスの夜、ベツレヘムの馬屋にお生まれになった神のみ子の神秘は、キリスト者としての私たちの全存在を包んでいると告げているのです。ヨハネ福音書が告げるこの神秘を味わい、新たな心でそれを深く受け止めることが、私たちにとってのクリスマスの祝いの意味です。

「初めにことばがあった。ことばは神と共にあった。ことばは神であった。」と荘重な調べをもって賛歌は始まります。その分、初めてこれを読む時には分かりにくいところがあるかもしれません。その分かりにくさの原因の一つは、原文のギリシャ語や英語のように日本語には定冠詞がないことにあると思われれます。「初めにことばがあった。」と歌い出される時、ことば一般のことを念頭に置いているのではなく、定冠詞が着いたことばについて語っているのです。強いて日本語であらわすなら、この賛歌全体が述べようとしている特定のことば、つまり、クリスマスの夜、私たちの世界に私たちと同じ一人の人間としてお生まれくださった神のみことばについて語ろうとしているのです。

クリスマスの夜に聴いた、ルカ福音書のクリスマスの物語は、私たちをベツレヘムの馬屋にお生まれになった神のみ子のもとに引き寄せますが、ヨハネ福音書の「みことば賛歌」は、そのようにして私たちの中にお生まれになった神のみ子の、私たちの想像を絶して広がる神秘を解き明かしているのです。

もう一度、ヨハネ福音書の冒頭の一節を読み返し見ると「初めにことばがあった」と歌われています。この出だしのことばは、「初めに神は天地を創造された。」という神による天地創造のみわざを語る旧約聖書・創世記の最初のことばと響きあっています。創世記の最初の部分を見るとそこには次のように語られています。「神は言われた。『光あれ。』こうして光があった。神は光を見て良しとされた」これが聖書の語るすべての初めです。「初めにことばがあった」というヨハネ福音書の冒頭の一節は、その「初め」について語っているのです。そのすべての初めは神のことばによって開始されたのです。全てのものの初めは、それを創造されることを望まれた神の内なる想いの発露としての、神のことばに拠って

いるのです。それゆえに、そのことばは「神と共にあった」のであり、その「ことばは神であった。」のです。こうして、「万物はことばによって成った」つまり万物は神のことばによって存在の世界に創造されたと賛歌は歌います。例外は何一つないのです。唯一つ神のことばを除いては。なぜならそのことばは、すべてのもの初めから、神とともにあって、神そのものであったからです。

「ことばのうちにいのちがあった。いのちは人間を照らす光であった」と賛歌は続いています。神のことばは、私たち人間のことばとは違います。私たちのことばは、多くの場合、相手の心に届くことなく消えてゆきます。私たちのことばは、多くの場合、私たちのいのちの根底から発せられることはなく、それゆえに、そのうちにいのちを孕んではないからです。神のことばはそのような空しいものではありません。むしろ、それは神の霊を孕んで、虚無そのものの混沌の中に、いのちあふれる創造の世界を生み出すのです。そして、それはいのちそのもののことばとして、クリスマスの夜、罪の闇に沈む私たち人間の混沌とした世界に生まれ出て、私たち人間を照らす光となってくださったのです。

「光は闇の中で輝いている。」賛歌はこれまでの荘重な調べから一転して、ここで、鋭い響きを放っています。混沌の闇に響いた、天地創造の神のことばは、今新たに、人の世の闇の中に光となって輝いている。新たな神の創造が始まっていると賛歌は告げているのです。

クリスマスの夜、羊飼いたちが見た天からの光はまさに、闇に包まれたベツレヘムの片隅にお生まれになった神のことばとしての、神のひとり子の誕生を告げていたのです。けれども、あのクリスマスの夜の物語が語るように、闇の中に輝くその光は、闇の中に眠り続ける世の人々には受け入れられなかったのです。クリスマスの夜の出来事は象徴的です。神のことばは人となって世に来られたのに、「世はそのことばを認めなかった。」「ことばはご自分の民のところに来たが、民は受け入れなかった。」と賛歌は沈痛な調べを奏でています。民とは、そこに神のみ子が人となってお生まれになった、旧約の神の民の末裔であるユダヤの人々です。いのちの光としてこの世に来られた神のことばを十字架に追いやったユダヤの指導者たちは、この世の闇を象徴しています。「光は暗闇の中に輝いている。しかし暗闇は光を理解しなかった。」のです。

このような陰鬱な調べを打ち破って、賛歌は一気に歓喜の終曲を奏で始めます。「ことばは、自分を受け入れた人、その名を信じた人々には神の子となる資格を与えた。この人々は血によってではなく、肉の欲によってではなく、人の欲によってでもなく、神によって生まれたのである。」ここに歌われていることが何を意味しているか、私たちは知っているはずですが。私たちは人となられた神のことばであるイエス・キリストを信じ、そのいのちの光に導かれて洗礼を受け、神の子らとされた者たちだからです。それは、私たちにとって罪の混沌の闇から救

い出された、神のことばによる新しい創造の体験であったはずです。

私たちにとってのクリスマスとは、神のことばが人となってこの世に来られた、神のみことばの受肉としての、イエス・キリストの誕生を祝う祝いです。そしてそれは同時に、そこから広がる、永遠の神のみことばの受肉によってもたらされた、神の愛のご計画の実現としての、私たちすべての「神の子ら」としての誕生の祝いでもあるのです。クリスマスを祝うたびに、私たちは、神の恵みの中にある私たちの全存在を包む、神の恵みの光の中に照らし出された、私たちが生きる、この恵みの「現実」を喜び祝うのです。

このクリスマスの朝、ヨハネ福音書のみことば賛歌が歌う、このような神の恵みのみわざの神秘に包まれて、その喜びの中で、今年も迎えることの出来たクリスマスを祝い合いたいと思います。

カトリック高円寺教会  
主任司祭 吉池好高